

8月末原稿〆切11月末印刷所に送付昭和51年2～3月
発刊

4) 印刷頁数 200 頁程度, 20編くらいを一応の目安と
する。

5) 内容は, 仮題のように現在における気象学と気象
事業の展望 (過去, 未来を含む) とする。

6) 13編程度を依頼原稿, 7編程度を募集する。

7) 編集委員 内田英治 (長) 浅井富雄 河村 武
竹内清秀 丸山健人 鷺崎 博

幹 事 金子光行

担当理事 高橋浩一郎

承認事項 浦川武雄ほか2名の入会を承認



気象庁予報部編

“異常天候監視報告”

この10年ぐらひは, 世界の各地から何十年, 何百年,
時として何千年ぶりといった“異常気象”が数多く報じ
られてきており, 昨今ではよほどの異常現象でもない限り,
気にとめなくなった感さえする。しかし, 現実には
この種の現象は引き続き起っている。このような異常
気象の多発は, 気候体制の変化に関連するのではない
か, といった見方も一部にはなされているが, その解明
の手掛かりを掴むためにも実態を把握しておくことがたい
せつである。

気象庁では, 今年度から新たに世界の異常天候を監視
する業務を開始し, その成果を年2回報告書として発表
することになった。第1号 (1974年1月～6月分, B5
版, 42頁) は昨年10月に刊行され, また第2号 (7月～
12月分) もこの3月に刊行される。以下にその概略を紹介
する。

内容は, 解説編と資料編に分かれている。

まず, 解説編では, 半年間の①各月の世界の天候経過
の概要が南・北両半球について解説されており, おもな
現象が記述されている。ついで, 月平均気温の異常高・

低温 (標準偏差の2倍以上) の出現地点, 月降水量の多
雨 (5分位法による階級区分 $Rd=6$)・少雨 ($Rd=0$)
の地点が符号化されて②異常天候発生分布図として南・
北両半球について示されている。

解説編の最後には, 北アメリカ・カナダ, ソビエト・
ヨーロッパ, アジア, 東南アジア・アフリカ, 南アメリ
カおよびオセアニアの③地域別の天候特性がくわしく解
説され, また要約も載っている。

資料編では, ①北半球月平均気温偏差および月降水量
の多雨・少雨域分布図 (この場合の多雨は $Rd=5$ と6,
少雨は0と1), ②北半球月平均気圧分布図が掲載され
ている。ついで, 北半球の主要穀倉地域における気温の
変動をみるために, ③半旬平均気温偏差経過図 (北半球
の9地点については1000—500mbの層厚から推定, そ
の他長春, 漢口, 広島, 新潟および旭川の気温偏差グラ
フ) が示されている。最後に, 月平均気温偏差が標準偏
差の2倍以上, または Rd が0と6を示した全世界の
地点についての④異常天候の気候表が月別にくわしく示
されている。

以上の資料は, 毎月南・北両半球の約1300地点から入
電する月気候電報 (CLIMAT) に基づくもので, 後日
多少訂正される部分があるかもしれないが, 最新の世界
各地域の天候の特性をみるには十分であろう。

なお, この報告物は気象官署, 関係省庁ならびに各大
学などに配布されているが, 販売については気象協会で
取り扱っている (1号2号とも1,3000円)。

(関根勇八)